

側面から興味を抱いてき た。特に明治期以降の欧米 いだろうか。実際に留学で

位置する眼前の光景を、 かも歴史長い文明の先端に 考察してみると、圧倒的に 先進の文明に威圧され、し への「留学」を、歴史的に 「その奥底から理解すると るのは、むしろ語学力や海 れども私がここで考えてい ことは、本当に心強い。け 者たちが、日本に沢山いる 外に飛び出すたくましい若 やボランティアで次々と海 はなくとも、NGOの仕事

り、フランスにも本格的な 保健用語には妙に強くな ったものだ。お蔭で病院や く、体力だと、つくづく悟 一漢方」療法があることを

熱が全く下がらず、留学の

時代、最初の3カ月間は微

の山と、そのシステマティ

館の中で、体調の悪さも、

けれどもあれから十年

私がことで方法論的に学ぶ の大学院に留学したのだ が、授業が始まった途端、 る私は、パリでもその専門 縮だが、比較文学を研究す ここで急に学問の話で恐

知ったりした。 準備は語学や学問ではな 書物を前にして嬉しい反 リに関するそれこそ万巻の 中心とする都市論を研究す る関係上、国立図書館とパ リ史歴史図書館に通い、パ 入口」でしかないかを思 自分の学問がいかに

ことは殆んどないと悟って

ックな管理だった。パリを 滞在許可書を取るための呆

ので、世界中から集まる研 書館に移る前の時代だった は、今のトルビアック新図 い知らされた。国立図書館

思った瞬間だったかもしれ れない、と生まれて初めて 少しは向いているのかもし れて、夢中でカードを取っ ている自分に気付いた時ー れるほどの苦労も思わず忘 ーあの時が自分は研究者に

留学の効用とは一体なん

た。1989年11月、ベル って私は気づくことになっ とはいえ「留学」とは、

だろう――。少なくとも 今や私の研究の一領域にな っている。 ど)から捉え直す仕事は、 ーロッパ写真家のパリな ーロッパの東と西(中央ヨ けの視点でなく、例えばヨ パリという都市を日本人だ

リンの壁の崩壊、東欧各国 のではない――と、十年経 語学や資料収集を意味する 広がっているかもしれな 期待している地平とは、ず いぶん異なる地平が、実は あなたの目に見えていたり 今、留学しようとしている い。それに留学の効き目が

も珍しくなく、お昼ご飯は 小さすぎ、入館1時間待ち 究者の数に比して閲覧室も

理解する心と ファイトもって

留学って 何?

みすぎた例なのであるが、 多い。いわば「深刻」に悩 祖国回帰した例はあまりに とは不可能だ」と絶望して、 外経験の少なさで臆してい

ろうが、私が留学した頃

ら、もちろん可能なことだ

り安い場合もある位だか 力だったら国内航空運賃よ 変化した点だ。今やアメリ

通にしている、というのも 折々、日本に一時帰国を普 も、お正月や夏休みなどの

あれ、遠い留学先からで メリカであれヨーロッパで

私の世代とは全く違ってき

たなあ、と思う。あとはア

えているのを知ると、その 台湾へ留学する人たちが増

か? この所中国や韓国、 で手近なものなのだろう て、留学という機会は気軽 今の大学生たちにとっ

点は十年以上前に留学した

るまで」とは思わなくても、 は、まさか「故郷に錦を飾

「帰るまでは頑張る」とい

たため、異文化理解の直接 多くが海外での日々を軽々 いるのを見ると、自分も何 とこなして「国際人」して 経験者が沢山いて、彼らの 源的問題を提起している。 ではない、異文化接触の根 の周りで、帰国子女や留学 しかし一方で、今や自分

う比較文化研究から出発し

「日本人のパリ体験」とい 私は自分の専門研究が、

かをしなければ――とあせ これは単に語学の問題だけ 楽しい想い出もあり、違和 人間何とか生き抜いて来る 感も沢山抱えて、それでも 積み重ねで、失敗もすれば 活もまた地道な日常生活の るが、どの道、外国での生 顔で海外から戻ってきてい だ一つ――みんな澄ました りの経験から言えるのはた る(かもしれない)人たち ーということだ。かく言 そんな方に、私が自分な

ムがまだあったように思 うような、妙なダンディズ

るほど私が驚いたのは、図 う。その代わり、呆然とす とにとそ意義があったと思 を「留学生」として学ぶこ 改革は進んでいなかったの おり、パリ大学での学問的 た。むしろ大学では、フラ てしまってすでに時を経て ノス語で思考すること自体 ロッパからアメリカに移っ 文学の理論的精緻化がヨー れは私が必ずしも不遜であ ることを意味しない。比較 しまった。といっても、こ ら、「蓄積とそ力なり」とヨ った。書物の森に迷いなが るありがたみは、値千金だ コンピューター検索(ただ 山のようで、しかも当時ま サンドイッチを廊下で立ち し館内のみ)で、新刊書を だ「走り」でしかなかった カード目録が、本当に宝の わらず、パリ関係の膨大な 珍しくなかった。にもかか 喰い――ですませることも 挙にキーワード検索でき

ーロッパ文化の真の強さを 見たのである。そして図書 な日常である。 話に付き合うような、そん なんてねえ……」と、世間 いて、子供の声が聞こえる ア大使館の窓があんなに開 のパン屋さんが「ルーマー ものではない。むしろ近所 証言」などという華々しい の解放――留学中の私はそ になったのである。もちろ もその推移を目撃すること んそれは、「歴史的事件の 住んでいた私は、否が応で の一連をパリで見聞した。 ルーマニア大使館脇に偶然

文化研究科超域文化科学専

いまはし・えいこ 総合

だけは怠らずに。

もって留学したらどうだろ う。――どうか細心の準備

する心と、向こうの暮らし を生き抜くファイトだけを

しろその国を理解しようと

な夢の実現とか考えず、

だからこそ、今の生活から

なり先かもしれないのだ。

の脱出とか解放とか、遠大

効いてくるのは、人生のか

61年東京都生まれ。92年

リ』(柏書房、93年/平凡社 を経て現職。主な著書に 後、筑波大学専任講師など 『異都憧憬 日本人のパ 了。パリ第四大学に留学 総合文化研究科博士課程修

野館に「埋蔵」された資料